

生と死 真剣論議

左京でシンポ

自殺など生死をテーマにしたシンポジウムが二十日、京都市左京区の市国際交流会館で開かれた。医師や僧侶、画家らがそれぞれの立場から、人とのつながりや、自然との一体感の大切さを訴えた。全国精神保健福祉連絡協議会（東京都）が主催した。精神科医の松本俊彦さんは、リストカットをする若者の心情を「心の苦しみに耐えるため、体の痛みを利用して」とした上で、体の痛み慣れると致死傷になる危険性を指摘した。

医師や僧侶、画家ら

否定された子が多いため「しかるのではなく、信頼できる大人もいることを伝えることが大切」と話した。岩室紳也医師も「心地よいコミュニケーションがないと生きる力は生まれにくい」と仲間の必要性を語った。

岐阜県高山市の千光寺の天下大圓住職は縁を切り口に話した。仕事などに行き詰まって死を考えた時、「人との縁が切れても、大いなるいのちに生かされている自分がいれば生き直せる」と述べた。約五十人の市民らが聞き入り、「生きていてくれてありがとう」と人から言われて今がある」などと自らの体験を話す人もいた。（相見昌範）



生死をテーマに幅広い議論が行われたシンポジウム
(京都市左京区・市国際交流会館)

人のつながり／自然との一体感 訴え